

コリント人への手紙第一12章25-27節 「御体の中のいたわり」

1A 人々の見る教会

- 1B 企業のような教会
- 2B 相談所のような教会
- 3B 交流会のような教会
- 4B 学校のような教会

2A 聖書の見ている教会

- 1B 神の建物
 - 1C 神との住まい
 - 2C 神の栄光
- 2B 神の家
 - 1C 長子なるキリスト
 - 2C 兄弟のつながり
- 3B キリストの花嫁
 - 1C キリストに結ばれた者
 - 2C 花婿のために整えられた者
- 4B キリストのからだ
 - 1C かしらなるキリスト
 - 2C 各器官のある体
 - 3C キリストの身丈への成長

3A いろいろな器官のある体

- 1B お客の否定
- 2B 評論家の否定
- 3B 同調の否定
- 4B いたわり合う一致
 - 1C 見栄えのしない部分
 - 2C 共に苦しむ、共に喜ぶ

本文

コリント人への手紙第一 12 章を開いてください。聖書通読の学びが、先週で 11 章まで来ました。今日は午後礼拝で 12 章を一節ずつ見ますが、今朝は 25-27 節に注目します。「²⁵それは、からだの中に分裂がなく、各部分が互いのために、同じように配慮し合うためです。²⁶一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、一つの部分が尊ばれれば、すべての部分がともに喜ぶ

のです。²⁷ **あなたがたはキリストのからだであって、一人ひとりはその部分です。**」私たち教会が、キリストのからだで、一人ひとりがその器官、肢体なのだとパウロの教えです。

コリントの人たちが、キリストのからだで、一人ひとりが部分なのだというのを聞いた時に、とても新鮮で衝撃的だったことでしょう。というのは、コリントの町には、ギリシアの医学の神アスクレピオスの宮があったからです。自分が病の時に、そこに行き、治療をしてもらうだけでなく、祈願してもらいます。アスクレピオスの神殿は、他にも数多くありましたが、コリントにあるものは、独特な習慣がありました。それは、体の部分、足であったり、手であったり、体の部分を象った粘土で作ったものが、お店で売られていました。自分が病気の器官のものを買って、宮に行きます。そして宮に行って、癒しを願うのです。そして、家に持ち帰り、祈りが聞かれることを期待しているのです。

こういった習慣がありましたから、パウロが、「あなたがたは、キリストのからだの各器官なのです。」と言われた時に、かなり生々しく受け止めたことと思います。自分たちが病の時に、いかにからだというもの、有機的で、それぞれがつながっていて、それでいて各部分はその働きをしているのを知ります。健康の時は、なかなか気づきにくいものですが、病になって、初めて、からだがいかに神秘的なのかを知ります。どこかの器官が自己主張することなく、体全体の益になるように動いています。そして、教会がまさにそういう存在なのだと、パウロは教えています。

1A 人々の見る教会

ところで教会というもの、一体どういうところなのか？意外に、捉えどころのない存在です。人々が集まっている、この世にある存在をもって、教会とはこういうところだと推し量るのですが、どうもそうでないことに後で気づきます。「似て非なる」ものなのですね。

1B 企業のような教会

教会を、会社のように考えることがあります。人々が集まって、そこで献金が集められます。なるべく信者を増そうとします。そして、いろいろな活動があります。そして、牧師のような指導者も立てられていますから、上司に部下が従うように、信者も従わないといけないと思います。

けれども、企業と教会は違います。企業は活動をしますが、教会は、存在を喜んでいることです。神とキリストを礼拝している中で、そこにつながりがあるところに、命があると私たち信者は知っているのです。もちろん、教会は、活動する面があります。しかしそれは本質ではなく、主にあって私たちが生きているということ、喜んでいるのです。

2B 相談所のような教会

また、ある人たちにとって、教会がカウンセリング・ルームのように、自分の心の内を聞いてもらうようなところだとみなしています。確かに、教会の人びとは親切です。自分のさみしさを聞いてく

れる人々がそこにいます。悩みを打ち明けて、祈ってくれる人々がいます。複雑な社会の中で、心の病が多くなっていますから、教会の暖かさに居場所を求める人々が多いでしょう。

けれども、教会とカウンセリングとの大きな違いは二つあります。一つは、人の愛ではなく、神を礼拝しているなかで、神の愛に目覚めるところです。キリストにある神の愛に満たされて、その愛によって互いを愛する共同体です。人が気にしてくれて、話を聞いてくれるかもしれませんが、それはあくまでも結果であり、そこに源はないのです。自分をかまってくれるところと思ったら、絶えず心がいらだち、「教会には愛がない」と裁くでしょう。それは、その人が間違ったところに心の満たしを求めているからです。もう一つの違いは、カウンセリングでは自分が受けることしか考えていないことです。一方通行なのです。しかし教会は、「互いに仕えなさい」と教えています。自分が受けるのは神からであり、自分が神にささげ、人々に仕える中で、自分自身も受けていきます。

3B 交流会のような教会

そして教会を、サークルのような交流会、同好会のように考える人々もいます。気の合う仲間が集まって、交流するところだと思います。これは、教会をカウンセリング・ルームだと思っている人と同じように、交わりに大きな不協和音を起こします。なぜなら、教会には、普段の生活では絶対に会わないような人々が集まっているからです。もし一般の生活であれば、この人とは付き合いたくないと思うぐらい、自分とは合わない人も集まっているのです。イエス様の周りにいた弟子たちは、まるで背景が異なり、もしイエス様が真ん中にいなければ、喧嘩していてもおかしくない背景を持っていました。ただ、キリストに捕らえられて、それで互いに愛し合っていくのです。自然ではなく、不自然な付き合いを、不思議にも、喜びと平安を覚えて、付き合っているのです。

4B 学校のような教会

そして、教会を学校のように考える人々もいます。「教会」という名前ですから、「教える会」とうことで、教えるを聞くところだと思います。そして、「よいお話でした」と満足し、かえって行くのです。勉強好きな人は、聖書の知識を体系的に得られるので有益だと考えます。しかし、こういった人々は必ず飽きます。なぜなら、教会は、自分が理解するところではなく、神を拝むところなのです。神とは、自分の理解を超えているからこそ、神であり、礼拝する対象なのです。理解を超えているから、この方をあがめ、この方に聞いて従うということのほうが問われます。理解以上に、従順が求められます。そして、学ぶこと以上に、祈ることが求められます。神との人格的な触れ合い、霊の触れ合いが大事なのです。

2A 聖書の見ている教会

こうやって、教会を誤解しやすい、いくつかの例を取り上げました。似ているのですが、本質が全く違います。では、この捉えどころのない教会という存在を、聖書は何と言っているのでしょうか？

1B 神の建物

その代表的なのが、「神の建物」神殿です。エペソ2章20-22節を読みます。「20 使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられていて、キリスト・イエスご自身がその要の石です。21 このキリストにあって、建物の全体が組み合わされて成長し、主にある聖なる宮となります。22 あなたがたも、このキリストにあって、ともに築き上げられ、御霊によって神の御住まいとなるのです。」エルサレムには、ヘロデの建てた大きな神殿がありました。そして、エペソの人々には、自分たちの町に大きなアルテミス神殿がありました。しかし、エルサレムにある神殿は、その中に神の像があるのではなく、神殿どころか、この地も、天の天も、神を収めることはできません。全知全能の創造の神ですから。そうではなく、神の名が置かれるところです。神がどのような方なのかを知り、神と交わることができる場所です。

1C 神との住まい

神は、天地を造られたときから、ご自分のかたちに似せた人を造られ、それだけでなく、ご自分が人と共に住むところを造られました。エデンの園がそれです。ところが最初の人アダムが罪を犯しました。そしてアダムとその妻エバが、エデンの園を追放されました。そこから、神はなんとかして、人をご自分と住むというところに戻したいと願われました。それが、聖書全体の話であり、それが神の救いと言ってよいでしょう。

神は、ご自分の民イスラエルを造られて、彼らの住んでいる間に、ご自分の住まわれる幕屋を造るように命じられました。そこで、祭司がいけにえを献げ、血を注ぎ、罪が清められ、そこに神が語られるところでもあります。そして、イスラエルが約束の地に定住してからは、ソロモンによって神の建物、神殿が建てられたのです。キリストが十字架に付けられた時に、その建物の聖所の中の垂れ幕が避けました。それ以来、キリストご自身が信じる者にくださる御霊によって、信じる者たち自身が神の宮となったのです。そして、主は地上に戻って来られます。地上の神の国では、エルサレムに主は神殿を再び建てられます。

それが千年間続き、この天地が過ぎ去ってからは、天からのエルサレムが、新しい地に降りてきます。こう書いてあります、「黙 21:3 私はまた、大きな声が御座から出て、こう言うのを聞いた。「見よ、神の幕屋が人々とともにある。神は人々とともに住み、人々は神の民となる。神ご自身が彼らの神として、ともにおられる。」世界は、神と共に住むというところから始まり、神と共に住むということで完成するのです。間もなく、クリスマスです。「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。(ヨハネ 1:14)」キリストによって、神が私たちの間に住んでくださるところです。

2C 神の栄光

そして、そのように神と時間を過ごすことによって、見えてくるものがあります。それは神の栄光です。神のすばらしさ、その輝き、その偉大さ、優しさ、すべての良いご性質が明らかにされます。

神の住まいには栄光の雲が満ち(出エ 40:35)、天のエルサレムには、光り輝いているのに、その中に太陽も月もありません。神と子羊の栄光が都の光となっているからです(黙 21:23)。「ヨハ 1:14b 私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。」教会は、神の栄光をキリストにあって見ていくところです。

2B 神の家族

こうして、神の建物、神殿であることが聖書には書かれていますが、教会は、神の家族であることも書いてあります。「エペ 2:19 こういうわけで、あなたがたは、もはや他国人でも寄留者でもなく、聖徒たちと同じ国の民であり、神の家族なのです。」神が、天地を造られた創造主であられるだけでなく、私たちと血を分かち合う父となってくださいということ。キリストが血を流して、契約を私たちと結んでくださいました。そして、私たちを、ご自分の霊で新たに生まれさせて下さり、神と父とする関係の中に入れてくださいました。それで、同じように神によって生まれた者たちは、兄弟、また姉妹となったのです。キリストの血による、新たな家族のつながりです。

1C 長子なるキリスト

永遠の昔から、天地が造られる前から、神と父子の関係にある方がおられました。キリストです。しかし、キリストは人の姿を取り、十字架で死なれ、三日目によみがえられました。そこには、一つの大きな目的がありました。父と子のこの関係の中に、多くの人々を招き入れることです。養子縁組として、多くの人を神の家族の中に招き入れ、一つとすることです。「ヨハ 17:21a 父よ。あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、すべての人を一つにしてください。彼らもわたしたちのうちにいるようにしてください。」

そこで主は、復活された後に、弟子たちのことを「わたしの兄弟」と呼ばれます(ヨハ 20:17)。ご自身が長男になって、父とご自身が持っている関係に付いてくるようにして下さったのです。「ロマ 8:29 神は、あらかじめ知っている人たちを、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたのです。それは、多くの兄弟たちの中で御子が長子となるためです。」なんとすばらしいことでしょうか、御子が持つておられる恵みが、私たち信じる者にも分かち合われています。

2C 兄弟のつながり

ですから、私たちは互いに兄弟また姉妹です。肉体の血はつながっていませんが、霊において、キリストの血でつながっています。ある韓国人の牧師さんが、面白いことを言っていました。私たちキリスト者は、それぞれの肉体における血液型を持っていますが、霊においては、J型を皆持っているそうです。そう、JesusのJです。キリストの血が心に流されたのです。

3B キリストの花嫁

そして興味深いことに、キリストは私たちにとって長男、長子であるだけでなく、花婿であるとも聖

書は書いています。「エペ 5:31-32 「それゆえ、男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となるのである。」32 この奥義は偉大です。私は、キリストと教会を指して言っているのです。」主が戻って来られて、私たちを天に引き上げます。そして、天において子羊の婚宴が開かれることが黙示録 19 章に書かれています。教会は、整えられた花嫁として出てきます。

1C キリストに結ばれた者

私たちは、神にいわれた数々の規則に従って生きる場所から解放されました。律法に対しては死んだと、ロマ 7 章にありますね。そうではなく、キリストに結ばれた者になりました。

2C 花婿のために整えられた者

そして、天において子羊の婚宴がありますが、今は、その整えをしている時です。みことばによって、水の洗いによって、教会をきよめて聖なるものになると、エペソ 5 章 26 節に書いてあります。

4B キリストのからだ

このようにして、教会は神の建物、そして神の家族、それからキリストの花嫁であるということを見ました。これらが、決して頭の中の概念ではなく、実体験していくところが教会なのです。どうにも捉えきることのできない理由はこれなのです。神秘的と言ってもいいでしょうか。そこで、もう一つ、パウロが何度となく、いろいろな手紙で教えているのが「キリストのからだ」なのです。つまり、キリストがこの地上に肉体を取って現れてくださったように、今は神の御霊によって、ご自身を教会によって現しておられる存在です。キリストは目で見えない方ですが、教会によって、この方が誰なのかを知ることができます。

1C かしらなるキリスト

身体ですから、頭が当然あります。そしてその頭から、神経を通してすべての体の器官に指令が行きます。それと同じように、聖書には、キリストが教会のかしらであることが書かれています。「また、御子はそのからである教会のかしらです。(コロ 1:18a)」かしらですから、教会で集中すべきことは、このかしらにつながっていることです。教会が企業であるとか、カウンセリングであるとか、またはサークルであるとか考えるのは、つながりが違うところに行ってしまうのです。キリストに結ばれていることに全集中し、そこに美しい、からだとしての統一性、一致が生まれます。

2C 各器官のある体

そして、私たちひとりひとりが各器官であります。パウロがこの 12 章で強調しているのが、この部分です。同じからだなので一つなのですが、いろいろな器官があります。それぞれが異なるのです。手が足になることはできないし、口が手になることはできません。それぞれが、それぞれの働きをすることによって、全体に調和が保てます。私たちはそれぞれを見ていると、本当に違うなと思いますね。けれども、不思議にも同じだなとも感じます。異なっているようで同じような感覚、こ

れが、からだの感覚です。

3C キリストの身丈への成長

そして、身体の特徴は、子供から大人になるにしたがって成長することです。教会も成長します、「エペ 4:13 私たちはみな、神の御子に対する信仰と知識において一つとなり、一人の成熟した大人となって、キリストの満ち満ちた身丈にまで達するのです。」ですから、私たち個々人がキリストに似た者になるということもあるのですが、それ以上に、ひとまとまりとして、教会として、キリストの姿にまで達するべく成熟していくということなのです。愛においてキリストと同じようになっていく時に、それが、教会が成長したということですね。会社のような数による成長ではありません。

3A いろいろな器官のある体

そうした中で、本文では、体の各部分が有機的に働いている姿を次のように表現しています。「²⁵それは、からだの中に分裂がなく、各部分が互いのために、同じように配慮し合うためです。」パウロが、この手紙の中で強調していることですね。コリントの教会は、ちょうど学級崩壊の子供たちのように、自分の願っていることしたいことを、自己中心的に動いていました。大人になって、愛によって配慮することを教えてきました。その姿は、身体の機能によく表れています。各部分がお互いのために配慮し合うことによって、それで、からだの中に分裂がなく一つになっています。もし、分裂があるとすればどうということでしょうか？身体の部分が独立しようと思う時に、その部分を「癌細胞」と呼びます。自分独りで機能しようとしている時に、体が蝕まれて死に至るのです。

1B お客の否定

身体ですから、次のようなことをしたら滑稽であることをパウロ、面白く説明しています。「12:15-16 たとえ足が「私は手ではないから、からだに属さない」と言ったとしても、それで、からだに属さなくなるわけではありません。16 たとえ耳が「私は目ではないから、からだに属さない」と言ったとしても、それで、からだに属さなくなるわけではありません。」これをしばしば、私たちはしてしまうのです。私は、「お客さんシンドローム」とでも呼びます。つまり、教会の他の人々を見て、自分はそのようではないから、ここに居場所はないと思うことです。これは、まさに自分は手ではないからからだに属しないと足が言っているのと同じです。

2B 評論家の否定

そしてパウロは、同じように次も滑稽であると話しています。「12:21 目が手に向かって「あなたはいらない」と言うことはできないし、頭が足に向かって「あなたがたはいらない」と言うこともできません。」これまた、おかしな話ですが、同じことをしてしまいます。私はこれを、「評論家シンドローム」とでも呼びたいと思います。自分がこの教会の一部でないかのように、悪い意味で客観視して、「この教会は、ここがいけない、間違っている。」と批評するのです。当事者ではなく、評論家になっています。それはあたかも、自分の考えているように他の人々がやっていないから、教会にあ

るべき姿とは違っていると簡単に言えてしまうのです。

3B 同調の否定

そして、次も滑稽です。「12:17 もし、からだ全体が目であったら、どこで聞くのでしょうか。もし、からだ全体が耳であったら、どこでにおいを嗅ぐのでしょうか。」全体が目、全体が耳、気持ち悪いです！これを私は、「同調シンドローム」とでも呼びましょう。みながやっているから、それに合わせようします。同調圧力です。それで、同じことを皆がやり始めます。それぞれの器官が異なっているのに、一つのことをやろうとするのです。

4B いたわり合う一致

しかし、私たちは、それぞれが異なる一つのからだの器官であって、その違いはむしろ、互いにいたわるために存在します。私たちは、身体というものがいかに不思議な存在か、絶妙なバランスを保ち、互いに補完し合っているかを知っています。

1C 見栄えのしない部分

そのことをパウロは、手前の箇所でご説明しています。「12:22 それどころか、からだの中でほかより弱く見える部分が、かえってなくてはならないのです。」このようにして、体の各部分が自己主張しないように、互いにいたわり合っているように、キリストの教会も、自分の利益ではなく全体に利益を求め、自分の利益ではなく他者の利益を求めます。愛によって互いを配慮して、それで体は健康を保ち、また成長していくのです。

2C 共に苦しむ、共に喜ぶ

ところで、身体のどこかが痛めば、他の部分が一生懸命、その痛みを補うために共に痛みます。足の指が柱に当たったら、頭のてっぺんまでその激痛が走ります。目に何か物が飛んで来たら、目を守るために、身体全体の部分が動きます。このことをパウロは、共に苦しむ、共に喜ぶという言葉を使って説明しています。「**一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、一つの部分が尊ばれば、すべての部分がともに喜ぶのです。**」

このように、キリスト教会は個人主義ではありません。個人の修養でもありません。個人が寄り集まったところではありません。自分が活躍するところでもありません。体の諸部分なのです。それぞれがキリストをかしらとしてあがめ、不思議にバランスを保ち、健康であろうと努力するところです。また、訓練を受け、成長します。思春期の子が、身体が一気に変化するように、私たちにも変化が起こります。そうやって成長するのです。私たちは、共にいることを喜びましょう。詩篇の購読で読んだとおりです。「133:1 見よ。なんという幸せなんという楽しさだろう。兄弟たちが一つになっても生きることは。」